

お墓

つい最近先祖の墓の一角に自分の生前墓を建てた。あまり聞きなれない言葉だが、「寿陵」と呼ぶらしい。これで人生の終着駅がはっきりしたので、ひとつ手前の駅までこれからもふらふらと立ち寄ってみたいと思う。

小学生のころ、同級生が頭を打ち突然亡くなった。自宅で寂しい葬儀を済ませた後、友の遺体は近くの墓地に運ばれ同級生の見ている前で埋葬された。幼心にもショックを受け、母親に言わせるとしばらくは夢遊病者のようだったという。

世界にはいろいろな墓がある。古代エジプトのツタン・カーメン王に始まり、ドラキュラ、ロミオとジュリエット、レーニンらの墓へもお参りしたが、そんな観光地化した墓と違い、庶民の墓もよく見ると民族性や、庶民の知恵が活かされていて興味をそそる。

3年前の夏、アメリカ南部のニューオーリンズをハリケーン「カトリーナ」が襲来し、大きな被害をもたらした。市郊外の共同墓地へ行ってみると、独立した一つ一つの墓石がすべて、高い場所に安置されているユニークな方式に驚く。ミシシッピ川沿岸のこの都市は、元来低湿地帯だった。昔の人は、洪水を恐れて独特の知恵と工夫を凝らすことによって、先祖の墓を洪水から護ったものだと言土地の古老は言う。近代科学の恩恵に浴する現代人より、耳目から覚る実感と先祖からの言い伝えで身を守る昔の人たちの方が、現実に生きていくためには、よほど優れた処方箋を持っていたということに気づかされる。

お墓に入る一歩手前の儀式で一番印象的だったのは、サイパン島で太平洋戦争戦没者の焼骨式に立会った時、立ち昇る煙にまぎれて、いずこからともなく飛来する群れなす蝶の乱舞である。この信じられない暗示的な光景を見て、遺族は身内の魂が天に召され、成仏得脱したとようやく納得することが出来るのである。

(近藤)